説教要旨『離れて、結ばれる』

ルカによる福音書 20 章 11～18 節

マグダラのマリアは、墓の外に立って泣いています。愛するイエスが殺されてしまった上に、墓のなかにはその遺体さえ見当たらない…彼女は、生前のイエスとのつながりが完全に断たれたかのような、やり場のない思いを抱いていたに違いありません。しかし、その時すでに、復活のイエスはマリアの「後ろ」に立って、彼女を見つめています。マリアが振り向き、発見してくれることを待っているかのように。とは言え、何だか回りくどい現れ方だなと思われるかもしれません。マリアの正面に現れてくれた方がよっぽど分かり易かったのに。でも、それではダメだったのです。なぜか。それは、マリアの見ているお墓の方向にイエスがいないからです。「かつて」はいたのですが、「今」はそこにいないのです。いや、そこにいる必要がないからだと言っても良いでしょう。

では、実際に後ろを振り向けばイエスに出会えるのかと言えば、そうではありません。私たちが目にしたり、想像したりできるものではなく、今まで全く見たことも感じたこともないところに復活のイエスが立っておられる、それが「後ろに立つイエス」の意味しているところです。だからこそ、マリアが後ろを振り返って実際にイエスの姿を見たとしても、最初はそれが「園丁だと思って」（15 節）、イエス本人だと気づくことが出来なかったのだと福音書記者ヨハネは記すのです。

マリアは生前のイエスの姿ばかりを追い求めています。しかし、イエスは彼女に対して「わたしにすがりつくのはよしなさい、まだ父のもとへ上っていないのだから。」（17 節）と語りました。「まだ」ということは、「やがて」イエスが天に昇られた後には許されるということでしょう。しかし、天に昇れば、その姿は見えなくなり、マリアは実際にイエスにすがりつくことなど出来なくなってしまいます。それでも、イエスは言葉の通り、昇天されます。なぜなら、そうすることで彼女は生前のイエスの姿に固執することから離れ、目に見えない新しいイエスとの出会いやつながりに結ばれていくからです。

受洗へと導かれたときと比べて、イエスの存在を生き生きと身近に感じられなくなってきた…そんな感覚的悩みを信仰者も抱くことがあります。そんな私たちに向かって、福音書記者ヨハネは語りかけています。「イエスは、あなたがたが見ている方向にはもういない。確かにかつて、イエスはそこであなたを導いた。しかし今、復活のイエスは、あなたの後ろに立っておられる。あなたが今まで味わった新鮮な喜びへと導き招くために」。

（文責：望月達朗牧師）